

ベンチャロン蓋付壺 (19世紀、高さ16.5cm、幅13cm)

この色鮮やかでエキゾチックな焼物はタイ国のベンチャロン磁器。ベンチャロンは「五」は「色」の意味で、ベンチャロンは五彩磁器のこと。この焼物はタイ国の物だが、タイの陶磁史のなかには入らない特殊な位置にある。アユタヤ時代

(1350～1767)

末期からバンコック時代

(1868～1910)

初期に中国から輸入されていた五彩磁器を手本として、色彩や文様等をタイ風にアレンジしながら、タイの王室用として中国の景德鎮へ注文していた。後に人気を博し大量生産へ対応するため、景德鎮だけでなく福建や広東地方の窯でも造られて、王族だけでなく一般の富裕層へも広がっていき、ベンチャロンの器種には皿、鉢、杯、水注、台鉢、化粧用の小壺、蓋付碗、掲載の蓋付壺などがある。緑をベースにしながらナラ



シンガ(半人半獅)と天人(釈迦)を交互に配し、間を火焰文で埋め、それぞれを赤、黒、白、桃色で塗りつぶしている。あまりにも強い色彩と見慣れぬ文様が、我々の目には奇異な印象を与えてしまう。日本も

17～18世紀にかけ、茶の湯の隆盛と共に中国へ大量の磁器を注文したが、当時中国ではすでに五彩磁器が完成していたにも関わらず、注文したほとんどが単色の染付だ。タイの人達から見たら地味に感じるのではないだろうか。同じように五彩磁器を知り、同じように中

国へ注文する方法を取りながらも、一方はより強い色彩を好み、一方では染付だけの単色を好む。どちらが優れているという事ではなく、気候風土や文化の違いを受け入れる事ができれば、より幅広く骨董品を楽しむ事が出来るでしょう。

ブロンズ イーカロオス像 (BC約200年、高さ32.5cm)

文明の衝突はその善悪を別にして新たな人種や文化を生み出していく。緩やかに穏やかに融合していくというより、初めは激しく暴力的に交わり、時に支配的な権力の下、突然別方向の力が加わり徐々に新たな文化へと姿を変えてゆく。ギリシャ神話のなかでイーカロオスは、バックスに葡萄の苗木と葡萄酒の醸造法を授けられ、それを人々に広めようとある村へ行き、羊飼いに葡萄酒を振舞う。初めて飲む葡萄酒に酔い潰れてしまった羊飼いは毒を飲まされたと勘違いしてイーカロオスを殺してしまふ。神話のなかの出来事だが何故か現実味がある。無知や他の文化を認めない悲劇がそこに描かれているから。このイーカロオス像は伝アフガニスタン出土。アフガニスタンは周辺6カ国と国境を接していて、



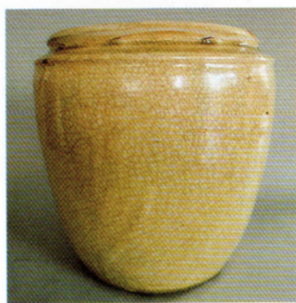
ユーラシア大陸の中間にあり、東西南北を結ぶ十字路に位置する。この国には紀元前のアレクサンダー大王の東征を始め、近代に至るまで様々な民族、宗教、文化が入り乱れ、近年も貴重な文化遺産を収蔵したカープル博物館が内戦により破壊されたり、玄奘三蔵も記録したバミヤンの大仏が爆発されたりしている。これも、これから続いていく永い歴史の一齣なのかもしれない。この像もいつの戦乱に巻き込まれたのか、本来あるべき葡萄の苗木と、それを握っている人差し指が右腕の中段から押し潰されているため無くなっている。それでもこの均整のとれた八頭身の体躯と、その端正な顔立ちには二千年を経てもなお美しく、優れた文化が確かに存在していた事を証明してくれる。

安南黄白釉筒型壺（ベトナム12～13世紀、口径15.5cm、高さ18cm）

昨今は若者のみならず年配の人にもベトナム旅行が人気らしい。安くて質の良い雑貨や、フレンチや中華の要素を取り入れながら発展していった美味しいベトナム料理が様々な人を惹きつけているようだ。もっとも日本とベトナムの交流は古く、17世紀徳川幕府の鎖国令が出る

まではベトナム中部にあるホイアンは南方における貿易拠点として大いに栄えていた。今も残る日本人街の跡には、当時、日本に帰れずこの地で亡くなった人達の墓地がある。

掲載の壺には本来共蓋が付いているはずだが、今は失われて無い。一般的に安南陶としてイメージしている15～16世紀に造られた白地に藍で文様を描いた染付陶器の前段階の焼物。この黄白釉壺と同時代か、やや古いタイプの同型壺には、肩部に蓮弁裝飾された物、胴部が瓜型

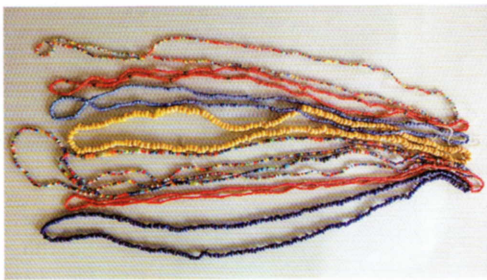


になった物、線彫りで文様を描いた物などがあり、いずれも中国様式から離れベトナム独自の焼物として確立している。日本には室町時代から請来されていたようだが、一気にその量が増えるのは桃山から江戸初期にかけて。ホイアンに拠点を作り、朱印

船の往来が活発化してからだろう。東京根津美術館にある同手の黄白釉蓮弁文壺は、江戸時代に請来されたが、それより約300年以上前に造られた物だ。茶人の好みを反映したのか、当時造られていた陶器だけでなく、茶の美に適用物であれば骨董品でも積極的に取り入れていこうとする茶人の心意気を感じる。この蓮弁壺は水指として取り上げられ、仁清が合わせ蓋を造っている。このような先駆的な焼物が日本の陶工にも刺激を与え、黄瀬戸や織部等、様々な原型になっていったのではなからうか。

## オケオビーズ（1世紀～6世紀）

チベットを源にしたメコン川は、中国雲南省を通りラオス、カンボジア、ベトナム南部のメコンデルタへと続き、南シナ海へ流れ出る。そのメコン流域の遺跡からローマ皇帝、アントニウス・ピウス時代とマルクス・アウレリウス時代の像が刻印された金貨が発見され、その一带をオケオ遺跡と呼んでいる。この遺跡は中国の史書によれば「扶南国」とあり、AD1世紀にメコンデルタに興り、ペルシャ、エジプト、インドと通じ、東南アジアの交易品を結ぶ重要な海洋貿易国家だったが、7世紀、現カンボジアの真臘国に滅ぼされた。20数年前にこのオケオ遺跡を特集したテレビ番組を観て、何も無い田畑から金貨や銀貨、色とりどりのガラスやメノウ



ウで出来たビーズが出土する事が信じられなかった。数年後、ホーチミンの骨董街を歩いていると、ショーウィンドーの中にあるの時見たビーズが飾られているではないか。それも一軒だけでなく、あちらこちらの店で。まさに欲しいと願っていた物が目の前で売られている。一軒の店に入り「オケオ？」と聞くと「イエス」と返ってきた。よく見ると店の奥にはまだ泥が付いたままの、大小色とりどりのビーズをバケツで洗っていて、状態の良い物をうまく色分けしながらビーズに紐を通していった。あれ程市場にあった物も数年を待たず、あっという間に姿を消してしまった。オリジナルの後は必ずコピーが溢れ出し、骨董の世界を汚していく。



## 褐釉輪花盤（中国元～明時代、径27cm、高さ5cm）

初めてその盤を見たのは今から20年以上前の事。それは宋から元時代に中国龍泉窯で造られた青磁の大盤で、釉が厚く掛かり造形に歪みもなく、焼成も完璧な最上手の物だった。たった一ヶ所、縁の所に1cm位の小さな欠けを除けば。

東南アジアに仕入れに行くとき折このような物に出合う。見つける度に、それが上手であればある程この小さな欠損が無ければと思っていた。ある時、同じような欠損が三ヶ所ある盤を見つけて、不思議に思い、そこをルーペで詳細に見てみると、先端の尖った物で上から叩いた打撃跡だった。今まで偶然に出来たと思っていたキズは、実は意識的に作られたものだったのだ。何故そのような事が行われていたのだろう。当時中国から



渡ってきた青磁や磁器は大変貴重で、特に優れた物は大切な儀式の時に使われた。また、その器自体にも霊力が宿るとされ、重病になった時など、その一部を欠いて粉にした物を飲むと病が治ると信じられていたらしく、このようなキズが出来ていたのだ。この盤も写真では分からないが、縁に一ヶ所小さな打撃跡がある。青磁や染付の盤は数多く見てきたが、このような褐釉（中国では醬釉）と呼ばれている茶褐色の盤は初めて入手した物。褐釉は小さな碗や小壺など日常雑器に多く使われるが、この盤は現地の好みを反映させた当時の注文品と思われる。無機質な焼物に霊力が宿ると信じさせる程、当時の中国磁器は魅力的で神秘的な物だったのだろう。

初期伊万里 青磁三足鉢 (1660年頃、径28.5cm、高さ8.5cm)

美食家で書画、篆刻、陶芸そのほか様々な分野で才能を發揮した魯山人(1959没)は、自作の器にどのような料理を盛り付けるかを具体的に図で示し、時には同じ器に花を挿す事も薦めている。魯山人の

食器はそれ自体で完成しているのでは無く、料理を盛りつけたり何かを足した時に完成するように出来ている。それは一種の「間」であり「空間」だと思ふ。これは欧米や他国には見られない日本独自の感性ではないだろうか。もちろん料理だけではなく芸術や落語、道(茶、華、柔、剣)など

日常生活全般にこの「間」があつて成り立っていると感ずる。江戸初期に我が国初めての磁器が佐賀県有田で生まれた。当初は中国明時代の焼物の模倣から始まったので、当然その形式や文様などはその影響を受け



た物になっている。この青磁三足鉢は当時有田で造られ、北前船によって新潟方面へ運ばれて350年間新潟の旧家で大切に使用されてきた。一見して明時代中国景德鎮窯で造られた青磁を意識しているが、厳格

な中国製とは違い甘い造りで、青磁釉もどこか優しげで、いかにも和製といった感じがする。見込み一杯にしのぎがあり、あたかも大輪の菊を思わせ、何よりこの三つの足が愛らしい。何も描かれていない分「間」を生かすことができる。全てがキャンパスなのだから自由な発想で好みに料理を盛ればよい。何の制約も受けずに自らの感性に従えばよい。食器としてではなく時に花を活けてもいい。少しだけ先人の真似をして美食家を気取るのも、美しい器があつてこそその楽しみといえよう。

## 手巻き柱時計（大正～昭和、高さ37cm）

外国から日本に来て驚く事は、街中の清潔さや親切な人柄、正確な交通機関や時間を厳守する事だと言う。私もそれが当たり前だと思っていたのだが、江戸時代までの日本人はそれほど時間に厳しくなかったようだ。

明治の近代化以降、欧米を手本とする新政府は急速に文明化を図っていく。従来の尺貫法や和算の廃止、太陽暦から太陽暦に改定など万事欧米化していく。とりわけ優れた機械技術の修得を指して最新の機械や技術者を招き近代日本の礎を築いていこうとする。

時計もそのうちのひとつで、従来大名や一部の商家しか持つ事が出来なかった和時計（櫓時計）に替わり、様々な外国時計（懐中時計や柱時計）が輸入された。とりわけ機関車鉄道の運行と発展には、従来の不定時法（十二支）によるあいまいな概念は許



されず、時間を守り規則を守る事こそが近代化への一歩とされ、時間厳守を迫及していく。そして輸入時計を参考に国産時計の生産に取り組み、全国へ普及していく。

当時の柱時計を見ると、外国の高級時計を真似て文字盤を珪瑯（金属に釉薬を焼き付ける）に見えるようにしたり、木枠に凝った彫刻を施したりと、

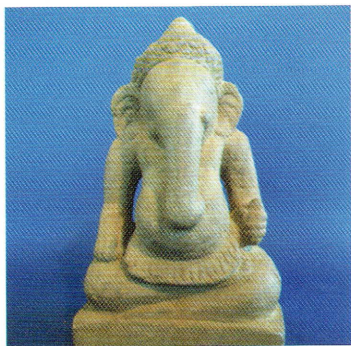
国産ならではの良さがある物も多くあったが、今ではあまり目にする事もなくなった。柱時計の良さは構造がシンプルなので今でも現役で使える事だ。

小さな踏み台に乗ってネジを巻くのは大抵子供の役目。「カチカチ」「ボンボン」と時を知らせる音が、それぞれの家に寄り添いながら生きていく。秒単位の正確さを求める現代より、多少誤差のある手巻き時計に人間らしさを感じるのは野暮な感傷なのでしょうか。

## アンコール朝ガネーシャ座像 (11~12世紀、高さ15cm)

この高さ15cmの小さなガネーシャ座像は、11~12世紀アンコール朝時代のもの。この時代おもに寺院やレリーフ、神像等を造るのに使われていた砂岩製。ガネーシャはそのユーモラスな容姿から多くの人達に愛されていると共に、この神が学問や金運、そしてどんな困難な問題も解決してしまう万能の力を持つとされているため、今でも篤い信仰の対象にもなっている。

ガネーシャはシヴァ神と神妃パールヴァティの子で幾つもの伝説がある。有名な物語として、パールヴァティの水浴の際、外で門番をしていたガネーシャは父の顔を知らなかった為、父であるシヴァ神の入室を拒んだ。ガネーシャは怒ったシヴァ神によって頭を切り落とされてしまったが、パールヴァティはこれを



悲しんだため、シヴァ神はガネーシャを生き返らせる事にし、最初に通りかかった象の頭を代わりにつけた(「シヴァ・プラーナ」より)。

ガネーシャ像はこのような座像の他に立像や四臂のものもあり、大きさも様々あるが、おそらくこのサイズの物は寺院等に安置された物ではなく、当時の貴族が個人的に住居に置いて日常祈りの対象にしていたのだろう。

この愛らしい神像を、現代の住空間にインテリアやオブジェとして取り入れる事は不遜なのだろうか。800年の時を経てその力は失われてしまったかも知れないが、この像に触れていると、不思議と気持ちが安らぐのは、そうありたいと思う自分の心がそう思わせているだけなのだろうか。



パンチェン彩文人型土器 (BC1000頃、高さ37cm)

両手を体の前で揃え、目はカメレオンのように突き出している。おそらく造られた当時には目の中心に貴石が嵌め込まれていたのだろう。足の表現はなく、大きく膨らんだ胴と背中には赤く渦文が彩色されている。正面から見るとまるで日本のこけしのようだ。強烈な個性を持つこの彩文土器は、今から約三千年前のものである。

現在のタイ国北部パ  
ンチェン村で1966  
年に発見された遺跡  
群は、その後の詳し  
い調査により紀元前  
3000年〜2000年  
頃のものと考えた。最上層は鉄器文化層、  
その下は青銅器文化層、最下層は金属を伴  
わない新石器時代層。最も古い土器は沈線  
縄文が主流で、そのなかには穀粒と粃の圧  
痕を伴うものがあることから、当時、すで  
に稲作が行われていた可能性を示唆してい  
る。



次の時代の青銅器を伴う文化層は世界でも初期の青銅器文化を持つものとして知られ、東南アジア全域における青銅器発祥の地ではないかと言われている。この層から出土する土器がクリーム色の器胎に赤色で文様を描いたもので、主文様としての渦文の他に蛇やトカゲ、巻貝や男性・女性器を表現したものなど、

様々なバリエーションがあるが、器形はいずれも一般的で、ありふれたものが多い。

掲載のような人体を表現したものは初見。出合った瞬間、体の中

へ飛び込んできて、心を鷲掴みにされ、揺さぶられてしまった。決して綺麗とか美しいという表現では捉えられない、人間の心の奥底にある原初的な胚芽のようなもの。三千年後、もし誰かまたこの土器に出合ったならば同じように心を奪われてしまうのだろう。

安南瑠璃蟹型合子 (BC15~16、高さ3.5cm、幅10.5cm)

瑠璃とは青く艶のある宝石の事。その深いブルーの色合いから日本では古いガラスの事も瑠璃と呼んだりしている。また、陶磁器にコバルトで絵付けした物を染付、全面に掛けた物を瑠璃釉と区別して呼び慣わされている。原料のコバルトは当初大変高価だったので、それを全面に掛けた物は一種の特注品だったのでだろう。

1997年のベトナムホイアン沈没船引き揚げ品約20万点のなかでも瑠璃釉の割合は極端に少ない。

掲載の瑠璃蟹型合子もホイアン沈没船のひとつ。

街中の商店が俄か骨董店

になった頃、メイン通りの中ほどにあった大きな店に入り、二階まで埋め尽くされた様々な引き揚げ品があるなか、主人の寝室にあったガラスケースの中に割れてはいたが珍しいオウムの絵皿や、数点の安南陶器



と一緒にこの蟹合子が飾られていた。このような象形合子は初めて見たし、まして瑠璃の蟹型合子なんて聞いた事も無かったので、どうしても手に入れたかったが、非売品の一点張りです。その時はあきらめて帰

国し、同年また訪れて交渉したが譲ってもらえず、翌年、三顧の礼でようやく手に入れた。

2000年にアメリカで行われたオークションには染付の蟹の上蓋だけが出品されていた。この蟹の他に象を模った合子もあるが、安南陶ではこの2種類しか見た事が無い。

2010年久しぶりに訪れたホイアンの街は平静さを取り戻し、あの大店の二階にあったガラスケースの中には、割れて売り物にならなかつたオウムの絵皿だけが数年前と同じようにじっと私を見つめていた。

南越銅桶 (BC2~1、高さ22.5cm、幅(耳まで) 24.5cm)

緑青の美というものがある。青銅器が永い年月地中に埋もれ、様々な化学変化を起し、造られた当初の黄金色から緑青という錆を纏う。

紀元前3〜1世紀頃、当時の中国中原文化とは別に、広東、広西、雲南、タイ、ベトナム北部にまたがるそれぞれの国には、独自の文化があり、様々な青銅器が造られていた。不思議な事に各国から出土した青銅器のうち、銅鼓と呼ばれている太鼓と、銅桶と呼ばれている掲載の銅桶だけは、どの国からも共通して出土している、両者には幾何学文様や同心円渦文等の文様構成も共通している。

この銅桶は20cm位から50cm位の物まで大小様々だが、形状はいずれも寸胴形で、両側に耳が付き鑄型を左右に分けて造られている。蓋受けのある物と口縁まで直線的な



物があり、従来は木の蓋があったのではと考えられていたが、この桶のように共蓋が造られていた事が分かる。

元々は、酒蔵器として造られたが、雲南では貯貝器(子安貝、貨幣と同じ)としても使われていた。銅桶は幾何学文と同心渦文だけか、そこに鳥文や、

稀に船文などを組み合わせるタイプはあるが、このような鳥文、鹿文、動物文が三段に分かれ、幾何学文と同心渦文で出来た蓋が伴う物は初めてで、今後の東南アジアの青銅器文化を解明していく上でも貴重な資料になると思う。

錆やシミを美しいと感じるのは日本人とフランス人だと聞いた事があるが、本当だろうか。難しい解釈は別にして、何れにしても今、目の前にある緑青を纏った銅桶が美しいと感じていることは事実なのだから。



古越磁 青磁蓮型おもり（6世紀、高さ9.0cm、幅10.5cm）

珍品とは、他のものとは違う稀なもの。人が持っていないものを欲しがるのは、骨董を愛する人ならば共通の心理と言えるのではなからうか。もちろん希少性が加わることで並品よりも価値も価格も上がるのだが、かと言ってお金があれば買えるものでも無い。こまめに色々な所へ出掛け、数多くのものを見るなかで初めて見つかるものなのだ。それゆえ見つけた時は迷わずに購入してしまう。

掲載の釣鐘型をしたものは「おもり」で、六世紀、春秋時代の中国 越の国で造られた焼物。越州窯

は一世紀頃から初期の青磁を焼成していた窯で、一時途絶えたが九世紀になり再度復活するところから、古い時期のものを「古越磁」と呼んでいる。このおもりも古越磁に属するもので六世紀頃に流行した蓮の型



を模している。

全体に淡いオリブ色の釉に特徴的な線描きで蓮弁を表し、頭頂部には小さな丸文で蓮の実を表現している。つまみ部分は欠損した箇所を直しているので、果たしてこのような直線のなものであったのか、蓮の茎のようなものだったのかは類品が見つかるまでは分からない。写真では分からないのだが、このおもりは一つの塊で、空気穴も無い。この大きさのものを割らずに焼成するには、よほどの経験がなければ難しいだろう。

時代も古く、造型的にも優れ、滅多に見つけることが出来ないこのおもりは、まさに珍品と呼ぶに相応しいもの。稀なもののは出現は瑞兆の証と言うから、私を含め皆様に幸あらんことを一年の初めのご挨拶とさせていただきます。